

そして、現在、心に置きたいことは、チベット文化は決して消えてしまった過去のものではなく、アーカイブの中にあるだけのものではない、今も生き続けているものだということである。社会は大きく変わったが、チベットの人々は生活し、信仰し、ダライラマもあり、村々には身近に転生ラマもいる。高僧は中国語も駆使して説法し、漢人の信徒も増えている。文学や音楽、映画などの新しい文化も生まれている。「人の力」こそが、文化を継承する一番大きな力である。私たち研究者も、その一端を担う者なのである。

第五八四回 六月二四日（金）

チベット仏教經典資料

——チベット大蔵經の保存と活用——

東洋文庫研究員 宮 崎 展 昌
鶴見大学准教授

河口慧海師がチベットより請求したチベット語大蔵經および関連資料として、東洋文庫には次のような資料が所蔵されている。

- ・写本カンギュル
- ・ナルタン版カンギュル・テンギュル
- ・デルゲ版カンギュル
- ・チヨネー版カンギュル
- ・蔵外文献

「カンギュル」は「仏説部」とも呼ばれ、仏教の開祖である釈尊が説いたとされる經典と律からなる文献群であり、「テンギュル」は「論疏部」とも呼ばれ、釈尊より後の仏教者らが著述した論書や注釈書などからなる文献群である。日本では、両者を合わせて「チベット大蔵經」と呼び、チベットに伝わる仏教の全書の叢書として知られる。さらに、チベットの仏教者らによって著されたチベット語著作は、一般に「蔵外文献」に分類され、チベットにおける仏教の展開を知るうえで貴重な文献群を形成している。

上記のうち、写本カンギュルについては、一九世紀に書写されたものながら、ダライ・ラマ一三世の勅許を得て、河口慧海師がガンツェにて書写されたものを持ち帰ったものであり、「東京写本カンギュル」として世界的にも知られてきた。東洋文庫では、二〇二二年度より、同写本カンギュルに関して、「宝積部」を皮切りに、インターネットアーカイブにて公開する事業を開始した (https://app.toyobunko-lab.jp/s/manuscript_kanjur/page/home)。

本講座は、その事業にもちなんだものであり、前半では、チベット語大蔵経の特徴を明らかにするために、アジア各地に伝わる大蔵経の特徴と来歴について概観し、後半部分では、近代日本におけるチベット大蔵経請来の様子と近時のチベット大蔵経の活用と保存について紹介した。

一、アジア各地に伝わるさまざまな大蔵経

——その特徴と来歴——

現在に至るまでアジア各地で仏教は信仰されているが、「大蔵経」あるいはそれに相当する仏教の全書叢書については、およそ、次の三つの系統が伝わる。

① パーリ三蔵とそれに付随する仏典群・スリランカ・ミャンマー・タイ・カンボジア・ラオス（南方上座部仏教圏）

② 漢語大蔵経・中国・日本・韓国・ベトナム（漢字仏教文化圏）

③ チベット大蔵経およびモンゴル大蔵経・チベット・モンゴル・ブータンなど（チベット仏教文化圏）

①「パーリ三蔵とそれに付随する仏典群」の特徴は、古代インドの言葉で残された唯一の仏典叢書であり、いわゆる大乘仏教の文献を含まない点が特徴的である。ただし、東南アジア諸国では、かつて大乘仏教や密教が信仰されて

いた痕跡が確かめられており、現在見るように、東南アジア諸国で上座部仏教が支配的になったのは、大乘仏教を排除した大寺派とよばれる派閥がスリランカで主流派となった一三世紀以降のこととされる。

一方、②「漢語大蔵経」と③「チベット大蔵経およびモンゴル大蔵経」はともに、大乘仏教の文献が多数を占めるが、後者には部派仏教文献は限定的にしが含まれず、密教文献の比率が前者よりも高く、後期密教文献も多数含む点が異なる。また、②「漢語大蔵経」には、「同本異訳」と呼ばれる、同一文献でありながら異なる翻訳者による訳文が複数伝わることもあるのに対して、③「チベット大蔵経」では、基本的には単一の翻訳しか伝わらない。また、②「漢語大蔵経」では、およそ千年以上の長期間におよぶ翻訳文献を伝えているために、訳語や形式の統一がほとんどなされていないのに対し、③「チベット大蔵経」では、訳語や翻訳の形式も統一が図られ、組織的な翻訳がなされたことから、インド語原典に比較的忠実な翻訳がなされているとされる。

二、近代日本におけるチベット大蔵経の請来

および近年におけるチベット大蔵経の活用・保存
明治から大正期にかけての近代日本では、大乘非仏説や

漢語大藏經への批判的な態度、あるいは海外研究者からの影響により、「入藏熱」とも呼ばれるチベット仏教およびチベット大藏經へ関心の高まりがあった。その中で、寺本婉雅、河口慧海、多田等観といった人々がチベット入りを果たし、それぞれ、チベット大藏經を日本に請来した。寺本婉雅はいわゆる北京版大藏經を入手し、それは世界で最初のチベット大藏經の影印版「北京版西藏大藏經」として戦後に刊行された。河口慧海は、上述の東洋文庫所蔵の大藏經諸本資料のみならず、大正大学や東京大学、東北大学にも所蔵される大藏經関連資料を請来した。多田等観は、チベットのセラ寺で一〇年間修行を積み、ダライ・ラマ一世とも親交を結んだのち、帰国し、東北大学所蔵のデルゲ版カンギュル・テンギュルをはじめとして、チベット大藏經諸版をもたらしした。上記のような先人らの努力により、近代日本においては、数多くのチベット大藏經が請来され、それをもとに目録が編纂されるなどして、仏教研究にも盛んに用いられてきた。

二〇世紀末ごろまでは、チベット大藏經については、上記「北京版西藏大藏經」のような影印本、あるいは、マイクロフィッシュのかたちで頒布されたものを利用するのが通例であった。二一世紀に入る頃から、デジタル画像の利用が急速に普及し、現在では、インターネット上で、チベッ

ト大藏經諸本資料が閲覧・利用できる。その代表的なサイトとしては、①The Buddhist Digital Archives (BUDA, <https://library.bdu.ac.jp/>)と②ウィーン大学カンギュル・テンギュル研究プロジェクト (TKTs, <http://www.kts.org/>)を挙げることが出来る。両サイトはともに最近大幅にリニューアルされ、相互リンクによって深く連関している。特に、後者のサイトでは、東洋文庫所蔵の河口慧海請来写本カンギュルの画像が、IIF (トリプルアイエフ) という仕組みを利用することによって閲覧可能になっている。

第五八五回 七月二二日 (金)

チベットの言語・文化の保存と継承

——フィールドワークと牧畜文化辞典——

東洋文庫 研究員 星 泉
東京外国語大学教授

チベットには、大藏經のように文字で継承されてきた有形の文化遺産だけでなく、口伝えや技術の伝承のみで継承されてきた無形の文化遺産がある。筆者は、特に後者に関心をもつ者として、文字以外の方法で継承されてきた牧畜